

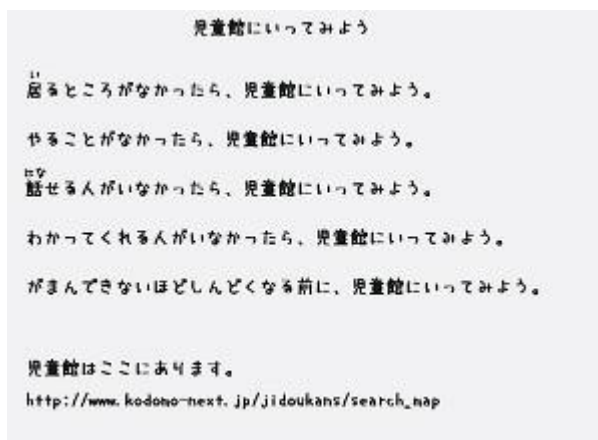


大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 2639 号 2015.9.19 発行

悩んでる子へ「児童館に行こう」



読売新聞 2015年09月18日

児童健全育成推進財団がメッセージ

「居るところがなかったら、児童館にいてみよう」——。全国に約4600館ある児童館を、困難を抱える子どもらに広く知ってもらおうと、児童健全育成推進財団がメッセージを発信し始めた。

同財団は、児童館の普及活動などを行っている。自傷や自殺、虐待、犯罪の被害、加害などが危ぶまれる子どもに対し、1人で気軽に立ち寄れる地域の居場所として利用してもらおうと、初めてメッセージを作成、今月からホームページに掲載している＝写真＝。

メッセージのタイトルは、「児童館にいてみよう」。「がまんできないほどしんどくなる前に」などと呼びかけ、全国の児童館を紹介するサイトのURLも載せた。

児童館は児童福祉法に基づいて自治体などが地域に設置した児童福祉施設。乳幼児から高校生までを受け入れて、職員と一緒に遊んだり話し相手になったりする。その中で不登校や虐待など、課題が見つかった場合は、相談に乗ったり、学校、児童相談所などにつないだりする支援活動も行っている。

しかし、子どもが放課後を過ごす学童保育と間違われたり、赤ちゃんや低年齢の子ども遊び場ととらえられたりすることが多い。困難に直面した子どもの居場所としての機能もあることを広く知ってもらおうと、メッセージの発信を決めた。

同財団の担当者は、「フラッと立ち寄ってぼんやりするだけでもいい。学校や家庭以外にも子どもが自由に出入りできる場があることを覚えておいてほしい」と話す。

子どもの居場所を巡っては、8月に神奈川県鎌倉市図書館の公式ツイッターで同市の女性司書が投稿した「つぶやき」が話題になった。「死ぬほどつらい子は、学校を休んで図書館へいらっしやい」といったもので、転載して紹介するリツイートが10万回を超えている。

老人ホーム虐待問題、運営会社に立ち入り検査 厚労省 日本経済新聞 2015年9月18日

介護事業大手の「メッセージ」（岡山市）が運営する介護付き有料老人ホームで職員が入所者を虐待していた問題で、厚生労働省は18日、同社の関東オフィス（東京都中央区）に介護保険法に基づく立ち入り検査に入った。

塩崎恭久厚労相は同日の閣議後の記者会見で「再発防止に向けた取り組みを実行し、利用者が安心して過ごせる環境を整えていただきたい。検査で実態を調べることが大事な一

歩だ」と述べた。

同社のグループ施設を巡っては、川崎市のホームで入所者3人が転落死したほか、大阪府豊中市のホームで職員による虐待があったことなどが判明している。厚労省は職員への研修体制や人員配置などに問題がないかを中心に調べる。厚労省は29日に岡山市の本社にも立ち入り検査する方針。メッセージのグループ施設は全国に300以上ある。

名古屋の老人ホーム、職員が女性虐待 川崎の施設と同系列 朝日新聞 2015年9月17日

名古屋市北区の介護付き老人ホーム「アミーユ大曾根」で昨年6月、20代の男性職員が70代の女性入居者の顔に未使用のおむつをのせる虐待行為があり、名古屋市が改善を指導していたことが16日、事業者と同市への取材でわかった。

川崎市で入所者3人が相次いで転落死した老人ホームの系列。事業者の「メッセージ」(岡山市)によると、職員は「いたずらのつもりだった」と説明。女性が体調を壊すことはなかった。入居者らに謝罪し、職員を厳しく指導したという。

また、川崎市は16日、3人が転落死した老人ホーム「Sアミーユ川崎幸町」に立ち入って監査した。厚生労働省の職員も同行。施設内では職員による入所者の虐待や窃盗事件も起きており、管理態勢を調べた。

虐待ゼロを願い 茨城大生がテレビCMを製作 9/26(土)テレビで放映【プレスリリース】

産経新聞 2015年9月18日

公益財団法人日本ユニセフ協会

第4回「ユニセフ One Minute Video コンテスト」最優秀作品

今月10日、警察庁は、今年1月から6月に掛けて全国の警察が摘発した児童虐待事件は376件に上り、被害児童数(386人)とともに、半期ごとの統計を取り始めた2000年以降最多となったことを発表。児童相談所への警察による通告件数も最多の1万7,224人と、18歳未満の子どもに対する虐待が深刻な状況にあることが、改めて明らかになりました。

こうした中、「虐待をゼロに」「子どもたちのSOSに気づいて欲しい」との思いを込め、茨城大学の学生5名が製作した1分間の公共CMが、本年4月から8月まで開催された第4回「ユニセフ One Minute Video コンテスト」(日本ユニセフ協会ほか主催・文部科学省後援)で最優秀賞を受賞。関係者のご協力により、この度、児童虐待問題を追及するテレビドキュメンタリーの放送に合わせ、「ユニセフ公共CM」として放映されることになりました。

[動画: <http://www.youtube.com/watch?v=vNPXGS5yJAQ>]

[表: http://prtmes.jp/data/corp/5176/table/557_1.jpg]

■製作者コメント

最優秀賞を受賞した瞬間は、本当にただひたすら驚きでした。今回の放送のように、発表の場を設けていただくことで、私達の作品が広がっていくことを大変光栄に思います。

この作品が、「子どもにやさしい世界」への一歩に繋がれば幸いです。(磯貝麻菜さん)

このような素晴らしい賞をいただくことができ、嬉しい気持ちでいっぱいです。

この作品を制作するにあたり、子どもたちにとってより良い世界とは何なのかということをも改めてチームで話し合いました。この作品が少しでも多くの方たちにとって子どもの問題と向き合うきっかけになることを願っています。(貝塚美加さん)

自分たちの作った動画が、このような形で評価されたことは、大変嬉しいです。

放送されることによって、多くの方々に動画の持つメッセージが届けば良いなと思います。

(江連里恵さん)

どうしたらメッセージが観た人に伝わるか、チームで何度も話し合いをして出来た作品だったので、最優秀賞をいただけた時はとても嬉しかったです。この作品が子供たちを守る行動のきっかけになればと願っています。(渡邊柚菜さん)

私たちの作品は最優秀賞を受賞できて、本当に嬉しいです。皆さんと一緒に作品を作りながら、いろんな知識を身に付ける事もできました。日本の社会や文化に興味がある私にとって、本当に得難いチャンスでした。 (劉旭さん)

■「ユニセフ One Minute Video コンテスト」 子どもたちが1分間の映像制作を通して自己表現力を養い、国籍を越えて興味や意見、夢や希望を分かち合うユニセフ(国連児童基金)が2002年にスタートしたプロジェクトの一環として、公益財団法人日本ユニセフ協会(東京都港区・赤松良子会長)が2010年から日本国内で展開するコンテスト。「みんなの約束 子どもの権利条約」をテーマに開催した第4回コンテストには、全国から500作品の応募があった。

■ユニセフについて ユニセフ(UNICEF:国際連合児童基金)は、すべての子どもの権利と健やかな成長を促進するために活動する国連機関です。現在190の国と地域※で、多くのパートナーと協力し、その理念を様々な形で具体的な行動に移しています。特に、最も困難な立場にある子どもたちへの支援に重点を置きながら、世界中のあらゆる場所で、すべての子どもたちのために活動しています。(http://www.unicef.org/)

※ユニセフ国内委員会(ユニセフ協会)が活動する36の国と地域を含みます

※ユニセフの活動資金は、すべて個人や企業・団体からの募金や各国政府からの任意拠出金で支えられています

■日本ユニセフ協会について 公益財団法人 日本ユニセフ協会は、先進工業国36の国と地域にあるユニセフ国内委員会のひとつで、日本国内において民間として唯一ユニセフを代表する組織として、ユニセフ活動の広報、募金活動、政策提言(アドボカシー)を担っています。(http://www.unicef.or.jp/)

【教育動向】いじめ防止に必要な基礎知識とは 国立教育政策研究所が解説冊子 斎藤剛史

産経新聞 2015年9月17日

岩手県矢巾町で起きた中2いじめ自殺事件は、社会に大きな衝撃を与えました。この事件に対応して、国立教育政策研究所(国研)は、いじめに関する事項などを解説した冊子『いじめに備える基礎知識』をまとめました。教員向け資料ですが、現代におけるいじめの特徴、普段から注意すべき事項、いじめが発生した際の取り組み方などが簡潔にまとめられており、保護者などにも参考になりそうです。

岩手のいじめ自殺事件の特徴は、「いじめ防止対策推進法」の施行後の事件であったこと、連絡ノートを通じて、学級担任が子どもからSOSを受けていたのに対応できなかったことなどです。これについては文部科学省も、学校の体制の見直しを通知しました。

国研は、いじめ防止の基本方針が「全ての教職員の意識や行動の中にまでは浸透しておらず、決められた手順に従って学校として動く体制ができあがっていないこと」に問題があると指摘。いじめ防止法により、すべての学校で基本方針が策定され、対応組織がつけられたにもかかわらず、実際にはそれらが機能していないのではないかと懸念から、いじめに対する基礎知識を改めてまとめることにしました。

冊子は、「いじめの理解と定義」「いじめの発生実態」「早期発見・早期対応」など6項目から成っています。たとえば、いじめの定義や実態などでは、犯罪にあたる暴力行為、暴力を伴ういじめ、暴力を伴わないいじめの3種類を挙げ、暴力を伴わないいじめ(からかい、無視など)は、ほとんどの子どもが被害体験と同時に加害体験も持っており、被害者と加害者が常に入れ替わる可能性があることなどを説明しています。さらに、軽いふざけのようにはしか見えなくても、行為の軽重で判断せず、それによる子どもの心身の苦痛の深刻さの度合いで判断しなければならないとしています。

また、いじめのアンケート調査に頼りすぎないように、釘を刺していることも注目されます。アンケートで発見できるのは、既に起こってしまったいじめだからです。同研究所は、未然防止のため、アンケートに現れないいじめを発見するためにも、すべての児童生徒の

観察を怠らないこと、個人の判断で解決せず必ず教職員が情報を共有したうえで組織として対応することを「基礎知識」として求めています。

さらに、冊子と別に、いじめに関する教員研修用の自己点検シートも作成しました。質問にどう答えたかで、回答者のいじめに対する理解や考え方を診断するものです。たとえば、いじめられた子どもの人権を最優先するのは「少し神経質すぎる」と感じるかで「はい」と回答すると、「大人の側の認識や見解に温度差があればあるほど、いじめの加害者を勇気付けることとなります」と問題点が指摘されるようになっています。

子どものいじめ問題について、保護者は十分に理解しているつもりでも、意外と知らないことも多いかもしれません。一度、『基礎知識』を読んだり、自己診断シートを試したりしてみてもいいでしょうか。（提供：Benesse 教育情報サイト）

東儀秀樹 47歳からの子育てに悪い事は一つもない 日本経済新聞 2015年9月17日

「年を取ってからの子育てに悪い事は一つもない」。こう語る雅楽師・東儀秀樹さんは、55歳にして8歳の子どもを育てるパパでもあります。著書『東儀家の子育て 才能があふれ出す 35の理由』（講談社）も出版した東儀さんに、子育てについての考え方、子どもとの接し方など聞きました。



■子育てのおかげで少年時代をもう一度やり直している

—ご子息が8歳というこのタイミングで本を出した理由を教えてください。

とうぎ・ひでき 雅楽師。1959年東京生まれ。父の仕事の関係で幼少期を海外で過ごす。高校卒業後、宮内庁楽部に入る。宮内庁楽部在籍中は箏楽（ひちりき）を主に、琵琶、鼓類、歌、舞、チェロを担当。1996年アルバム『東儀秀樹』でデビュー。2000年『TOGISM 2』で日本レコード大賞企画賞を受賞。絵本『光り降る音』『天つ風の音』『星月夜の音』（文・かんのゆうこ）では挿絵を担当。皇學館大学特別招聘教授、また上野学園大、名古屋音大、池坊短大、大正大学、國學院大の客員教授を務める。写真：吉村永

子どものことを本にするというのは、出版社から声を掛けられるまで意識していませんでした。今まで子育て本は、子どもを立派に育て上げ、ちゃんと結果を出した人が出版するものだと思っていましたから。僕の息子の「ちっち」は、まだ8歳。これからグレるかもしれないし、僕と仲が悪くなるかもしれません。

でも、子育ての渦中だからこそ熱く書けることもあります。後から振り返って書くと、昔を美化してしまうかもしれない。だから、この本では今この瞬間を日記のようにそのままつづりました。

—実際に本を読むと、東儀さんが深く子育てに関わっていることが分かります。

周りの友人などの子育てを見てきて、うちの子育てはちょっと様子が違うぞというのは感じていました。みなさん、大変な思いをして、子育てが重労働になってしまっている。父親が子育てに参加しない、興味が無いわけではないけれどよく分からないというのも耳にします。

ママ友と集まっているときにも、ちっちとのエピソードを話すと「へえー、すごいね」「それやってみよう」なんて感心されます。やっぱりうちの子育ては違うんだ、それを伝えることで、人のためになっているのかなという実感があります。

「すごいね」と言われても、僕は子育てを頑張っているつもりはありません。頑張らずともちっちといると自然とわくわくしてしまうし、楽しくなってしまうんです。

自分の子どもが小さいうちにたくさん一緒にいるというのは、かけがえのない大切な時間です。それを伝える手段として、本にまとめるのもいいなと。

—ご子息が誕生したのは東儀さんが47歳の時。その年齢での子育てはいかがですか。

年を取ってからの子育てに悪い事はないと思いますね。親が一通りのことを体験しているので若いときに比べて戸惑うことが少ないですから。

——東儀さんは元々、子ども好きだったのでしょうか。

子どもは苦手な方でした。でも、なぜか子どもと動物には好かれる質なんです。こっちは苦手なのにすぐ向こうから寄ってくる。女性にも好かれますけれど（笑）。

人前で他人の子と遊ぶのも、なんだか気恥ずかしくて。今はちっちを溺愛していますが、子どもは苦手なままですね。

子育てをしてみていろいろな発見がありました。大人だと忘れてしまっていることも、子どもの目線になってみると様々な発見があります。子育てをすることで、大人はそれをスキルとして身につけることができます。僕はちっちと一緒に少年時代をもう一度やり直しています。ちっちと一緒に僕も成長しているんですね。



■子どもの話は面白い。その瞬間に聞かないともったいない

——東儀さんのお父様は、子育てに協力的だったのでしょうか。

うちは典型的な昭和のサラリーマン家庭でした。東儀の名は母から来ていて、名前だけ雅楽師の家系だったんです。

父は「子育ては女の仕事だ」というタイプ。仕事が忙しく、子どもに会えるのも日曜だけでしたが、そのときもべったりという感じではありませんでした。

僕の子育てとはだいぶ違う感じですが、別に父が反面教師になっているというわけではありません。ちっちの子育てには、好奇心旺盛でいつもワクワクしていたという僕本来の性質が関係しているように思います。

——子育てで大切にしていることは。

子どもの話をしっかり聞くこと。子どもが話し始めたら、顔を向けて一部始終を聞く。僕の場合、聞きたくなくなっちゃうから聞くんですけどね。

子どもの話は面白いです。大人はこんなこと思いつかないなというようなことを言い出します。2年3年すると話の内容も変わってきってしまうので、そのときそのとき、しっかり聞いてあげないともったいない。

僕は家で仕事していることが多いのですが、子どもが話したがったら今やっている作業を中断して聞きます。「あとでね」と言って、子どもが一番話したいタイミングを逃してはいけないと思います。

「先生に誤解されて怒られた」「友だちに急に叩かれた」など、子どもは外で理不尽な目に遭ってきます。それなのに、家でも「あとでね」なんて疎外感を味わわせてはいけません。外で何があっても、家に帰れば誰かが話を聞いてくれる。そういう安心感があれば、子どもは強くなれる。これからの人生を強く生きていけます。

もしこれからちっちがいじめられたとしても、きっと相談してくれると思います。そんなときのためにも、家は最後の砦にならなくてはと思います。



■大人の中に連れていったから社交的な子どもになった

——8歳のちっち君はどんな子に育ったのでしょうか。

社交的だし、人と違うことを恐れない子ですね。マイナスなこともワクワク報告してくれるんです。

先日も「〇〇君はちっちのことが一番嫌いなんだって！」と教えてくれました。

——「一番嫌い」ですか。そのとき、東儀さんはどうされたんですか。

そのときは一緒に「何かしたかな？」と原因を考えて、何も思い当たらなかったの、「ちっちにはこんな素敵なお父さんがいるからやきもち焼いてるんだね！」なんて笑い合いました。

子どもには、人って全部同じじゃないんだ、それぞれ違う考えを持っているんだ、好き嫌いがあって当たり前なんだって折に触れ教えています。

ちっちは幼稚園の頃から、いろいろな人と話すのが好きな子でした。公園に行くと別の幼稚園の子どもたちがいることもあります。そういうとき子どもって、幼稚園ごとにグル

ープを作ってその中で遊ぶんですね。でもちっちゃだけは、「ほかの幼稚園の子とも話してみたい」って、別の幼稚園のグループに交じって遊ぶんです。

思えば赤ちゃんの頃も社交的でした。僕がちっちを抱っこして近所を散歩していたら、ほかの人を指さしてその人の前に連れて行けって言うんです。好奇心の塊なんですね。

——どうして社交的になったのでしょうか。

意識して大人の群れにちっちを連れて行くようにしていたからでしょう。

大人は子どもに対して優しいです。優しく話しかけてくれるし、自分の話を聞いてくれる。同年代の子どものように、おもちゃを取ったりたたいたりもしません。ちっちは大人と接して、人って優しいんだ、触れ合うと面白いんだと感じたようです。

公園によく母子の集団がありますが、お母さん同士が気を使い合っているように見えます。その頃の子どもはまだしゃべれないから、おもちゃを取ったとかたたいたとかトラブルも多いですね。子育てでは、親も子どもニコニコしているのが一番。僕は同年代の子ども達が公園デビューする頃、ちっちを大人たちの中に連れ出していました。

そのおかげか、ちっちは言葉によるコミュニケーションが上達しました。言葉をしゃべるのが早く、また文章の組み立てがうまい子に育ちました。

今ではすっかり、ほかの子より余裕のある子どもに育ちました。子どもの世界ではおもちゃの取り合いでケンカになることがよくありますが、ちっちはほかの子におもちゃを貸してあげます。自分が面白かったからほかの子にもその面白さを伝えたいんです。自分が大人に優しくされたから、人にも優しくできるんでしょうね。(ライター 福村美由紀)

主婦志望の学生が見て感じた共働き家庭のリアル 日本経済新聞 2015年9月18日

大学生が共働き家庭に入り、子育て支援を行うインターンプログラムの「ワーク&ライフ・インターン」。スリール（東京・新宿）が運営するプログラムです。今回は、学生たちが4カ月間のプログラムを通して学んだことを発表する「最終プレゼンテーション会」の様子をレポートします。働く家庭での子育て体験を通して、学生たちはどんな気づきを得たのでしょうか。また、共働き家庭における課題を解決するために学生たちが知恵を絞った「10年後をより笑顔にするためのアイデア」でも、興味深い具体的な提案が聞かれました。



■学生の将来の悩みについて社会人も真剣に考える (写真：鈴木愛子)

「ワーク&ライフ・インターン」の特徴の一つに、子どもを預かる大学生と訪問先家庭との交流の時間があります。学生は、訪問先家庭の母親・父親にその日の活動報告をすると共に、自分の進路の悩み、社会人生活への不安などを話し、相談することができます。母親・父親にとって、仕事を終え帰ってきた後で学生たちの話を聞くのは一見、大変なこと。でも、学生たちが自分の将来と真剣に向き合い、子育て体験を通じてどんどん成長していく姿を間近に見ると、逆に元気をもらうことが多いのだと言います。

このプログラムでは他にも、若手社会人が学生の相談に乗る「メンター制度」や、企業の社員と共同で学ぶ「キャリア勉強会」など、社会人と学生が交流する機会が多く設けられており、これまで多くの社会人が学生の成長を支援してきました。

スリールのアンケートによれば、「ロールモデルが身近にいる」と答えた学生はインターン前の4割からインターン参加後は8割へと大きく増加。「社会に出るのが楽しみ」という回答も、6割から9割まで増加しています。なぜこのような変化が生まれるのでしょうか。

「最終プレゼンテーション会」の取材を通じて、インターン生の成長の過程や、考え方が変わっていく過程を知ることができました。

■サイボウズ青野社長「この世代から空気をもっと明るく変えていって」

2015年6月27日に東京・虎ノ門で行われた最終プレゼンテーション会。40人のインタ

ーン生（女性 36 人、男性 4 人）のプレゼンを見守るのは、受け入れ家庭やその OB・OG、社会人メンター、応援企業の社員など 60 人以上の社会人たちです。休日にもかかわらず多くの社会人が集まるのは、学生たちへの期待の表れ。当事者になる前から学生が「子育て」や「働くこと」に関心を持ち、気づきを生かして社会に出ていけば「子育てしやすく、働きやすい社会」を実現する原動力となっていくはずです。

サイボウズ代表の青野慶久さん（写真：鈴木愛子）

「応援企業」としてスリールの活動をサポートしているサイボウズ代表の青野慶久さんも、会の冒頭でスピーチをし、学生たちへ次のようなエールを送りました。

「日本の少子化は、ワークライフバランスが崩れたままになっていることが原因です。男性の育休取得率は、たったの 2.3% という状況ですが…ぜひこの世代から、空気をもっと明るく変えていってください。機運は高まってきているから、もう一息。皆さんが『社会を変えるんだ』という決意を持って、頑張ってください」

■働くママは忙しくても「かわいそう」ではなかった

インターンを体験した学生代表 2 人の発表では、インターンで得た学びについて、大変興味深い生の声を聞くことができました。

●野々村詩織さん（聖心女子大学 3 年）

以前の私は漠然と「働くママってかわいそう」と思っていました。仕事に育児に追われ、子どもとゆっくり接する時間がなさそう。自由な時間もなさそう。だから、自分は、子どもができたなら専業主婦になろうと思っていました。キャリアについても、これといったビジョンはなくて…。

（写真：鈴木愛子）

私が訪問した家庭のママは、仕事、子育て、さらに大学院通いと、確かにすごく忙しい方でした。でも、家族の時間をとても大切にしていたし、自分の時間もちゃんと持っていました。子どもに対しても、離れる時間があるからこそ、すごく愛情を注いでいた。全然「かわいそう」ではありませんでした。こういう働き方もあるのだと知り、子育てをしながら働くことへの抵抗感がなくなりました。

もともと私は「自分のやりたい仕事なんてない」と思っていました。（メンター制度の若手社会人の）メンターから『本当にやりたいこと、ないの？』と聞かれたときも、「心理学を生かせたらいいけど…」「EdTech（エドテック）には興味があるけど…」とあいまいに答えるだけでした。いつも最後に「けど…」が付いて、行動には移せなくて。するとメンターは「心理学はコミュニケーションの基礎になるものだから、どんな仕事でも役立つよ」「EdTech に興味あるなら、IT 分野にも興味を持てるんじゃない？」と、私の言葉をポジティブな提案に変換してくれました。それによって、将来どうしたいのか、今何をすべきなのか、徐々に分かってきました。自分の考えを言葉で発信することの大切さも知りました。

●神田千聡さん（青山学院大学 3 年）

私がお預かりした 4 歳の子は、ごっこ遊びに夢中で、いつも自分以外の誰かになりきっていました。私はその子に夕食を食べさせ、22 時までに寝かしつけなければならなかったのですが、22 時から逆算して、何時までにあれをさせてこれをさせて…と常に考えていました。でもその子は、全然私の思うようには行動してくれなくて。すごく悩んで、色々な人に相談しました。

（写真：鈴木愛子）

相談するうち、自分はスケジュール通りに子どもを動かすことに気を取られすぎて、彼女にきちんと向き合えてなかったのではないかと、気づきました。そして、15 年前、自分が 4 歳のころのことを思い出しました。共働き家庭の長女だった私は、母に迷惑をかけたくなくて、感情を抑えてぬいぐるみに話しかけるような子どもでした。もしかしたらこの子も、当時の私と同じ気持ちかもしれない。自分をもっと受け止めてほしいのかもしれない



い。そう気づいて、真正面からこの子の思いに向き合おう、と決めました。そうして私が接し方を変えたところ、その子はごっこ遊びをしなくなったのです。代わりに、『今日はこんな楽しいことがあったよ』と彼女自身の話をしてくれるようになりました。

これまでは「やらなきゃいけないこと」を基準に、そこから逆算して生きてきました。でも、もっと私らしく、やりたいことをやっていいんだなと気づいたんです。充実した今があるからこそ、後悔しない未来があるはず。インターン中は、色々な人の意見を聞き、様々な価値観を知ることができました。自分の世界と、他人の世界をコラボさせることの楽しさにも気づきました。将来は、広告など、商品をいかに魅力的に伝えるかを考える仕事に就きたい。自分に素直な、柔軟な女性でいたいです。

■共働き家庭の献立作りと買い出しの負担を軽くしたい

インターンでの学びを基に、「10年後をより笑顔にするためのアイデア」を4人ずつのチームで発表するセッションもありました。共働き家庭の子育てを体験した学生ならではの、鋭いアイデアが並びました。例えば、忙しい共働き家庭では「献立作りと買い出し」が大きな負担になっていることに着目したチームは、それを軽減するサービスを考えました。

これはインターネットで注文ができる、レシピや食材の配達サービス。ウェブ上でアレルギー食材の有無など希望条件を設定すると、要望に合ったレシピと食材が自宅に届きます。条件設定時に「初心者向け」を選ぶと初心者向けレシピが届くので、パパに料理を任せたいときなどに便利。また、1枚のレシピでその日の3品分の料理が作れるように書かれているので、レシピサイトのように、複数のページを行ったり来たりする必要はありません。料理が苦手な人でも、効率的に料理が作れるように工夫されています。

さらにこのサービスは、子ども向けの食育教材などを提供することが特徴。そこには、働くママの葛藤を知った学生たちの思いが込められていました。

「ママさんたちは、料理に興味を示す子どもの気持ちを受け止めたいと思っている。けれど実際、子どもが料理に参加するとすると、準備や片付けが大変で、忙しいママの負担が増すばかり。子どもの気持ちをとるか、自分の時間をとるか…。ママさんたちは葛藤していました。そこで、子ども向けの食育教材や、子どもでも手伝える専用レシピがあれば、両方の思いをかなえられる、と考えたんです」

(写真：鈴木愛子)



■一人ひとりが発信し、行動しよう

こうした提案を受けて、社会人参加者はアイデアをよりよくするためのアドバイスをしたり、質問を投げかけたりと、学生たちと議論を交わしました。実際、リクルートに勤務するメンターを通じてアイデアの一部をリクルート社内のビジネスプランコンテストに応募する動きも出ているそうです。

続く「全体セッション」では、一人ひとりが「10年後のなりたい自分のために、これから何をしたいか？」を考え、全体に共有。その場にいる全員が「当事者」として意見交換を行いました。

インターンを通して「子育てをしながら働くことのリアル」を学んだ学生たち。漠然とした不安から選択肢を閉ざすのではなく、「仕事と子育ては両立できるんだ」と知った上で、自分の価値観と向き合い、前向きに将来を描けるようになったことが取材を通して分かりました。頼もしい学生たちの姿を見た社会人参加者たちも「引き続きこの活動に関わり学生を応援していきたい」「働きやすく、子育てしやすい社会になるように、一緒に頑張りたい」などと語り、より明るい未来へ向け、世代を超えたいねりが生まれつつあることを感じました。(ライター 柳澤明郁)



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町 5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行